

日蓮教学と本覚思想

——日蓮聖人との関わり合いを中心として——

伊 藤 慎 一

日蓮教学と本覚思想の関係は従来問題とされて来たが(1)、まさしく、叡山仏教の流れを汲み、鎌倉新仏教の一創始者である日蓮聖人にあっても、この本覚思想を教学形成の根底に置いた事は、当然の事であると言えよう。では、日蓮聖人にあつて、この本覚思想は、どの様に受容されたのであろうか。この小論では、聖人の御遺文を見つつ、今一度、その問題を検討してみたい。

まず、本覚思想とは、相即不二論を理論的に完成させた思想であり、そこに於て全ての事項は肯定されるのである(2)。

それをふまえて、『開目抄』『観心本尊抄』の両抄を見てみると、まず『開目抄』に、

爾前迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果

をとき顯す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真十界互具・百界千如・一念三千なるべし。(定遺五五二) という様に、無始以来、仏界と一体不二の我々の関係が価値づけられる、本因本果を説きつつ、さらに、

今爾前迹門にして十方を浄土とがう(号)して、此土とかれしを打かへして、此土は本土となり、十方浄土は乘迹の穢土となる。(定遺五七六)

と、娑婆本土ということが主張され、凡夫所見の世界を仏界現成の相と見、我等の一念は同時に本仏の一念であるという不二相即論が見られるのである。

また、『観心本尊抄』では

観門難信難解、百界千如・一念三千、非情之上、色心

二法十如是是也(中略)草木之上不_レ置_二色心因果_一、
木畫像奉_レ侍_二本尊_一無益也。(定遺七〇三)

と、色心双具の思想が見え、また

我等己心_レ積尊_ハ五百塵点乃至所_レ顯_三身_ニ無始古_レ仏也。

(中略)上行無_レ辺行淨行安立行等_ハ我等己心_レ菩薩也。

(定遺七一一)

と、己心の無始の古仏、己心の菩薩がとかれ、淨土につ
いてもいわゆる四十五字法体段では、

今本時_レ娑婆世界離_三三災_ニ出_三四劫_ニ常住淨土_{ナリ} 仏既過
去_レ不_レ滅未來_レ不生 所化以_レ同体 此即己心_レ三千具足

三種也問也。(定遺七一一)

と、娑婆淨土の不二相即論が見られるのである。この不
二相即論の根底に流れるものはまさに、「十界互具より
ことはじまれり。」という一念三千の思想であろう。浅
井円道教授は、『講座仏教思想』第六巻の中で、一念三
千は人間性を肯定する思想であるとされるし(3)、『上
古日本天台本門思想史』の中では、最澄はじめ上古諸師
の思想に大きな影響を及ぼしたものに、「十界互具」
の思想があることを述べられている(4)。さらに、この
十界互具・一念三千が後の中古天台に大きな影響を及ぼ
し、絶対不二の顯在的相即論である本覚思想が展開され

るといふ事を考え合わせると(5)、一念三千の思想に潜
む本覚的思想が確められる。

そして、この「一念三千」を、中国・日本を経て受け
継がれた日蓮聖人にあつて、この「一念三千」こそが、
日蓮聖人の本覚思想ではなからうか(6)。

しかしながら聖人は、『観心本尊抄』に於ける

雖_レ爾_レ文_ニ心者_ニ積尊_ハ因行果徳_ニ一法妙法蓮華經_ニ五字具足_ニ。
我等受_三持_二此_レ五字_ニ自然讓_二与_一 彼因果功德_ニ。(定
遺七一一)

という文に於て、受持と讓与という形で人間を肯定して
行こうとするのである。

前述の様に、「一念三千」という形で、本覚思想を受容
しながら、尚且つ付帯条件をつけるといふ事は、聖人教
学に於て、如何なる意味合いを持つものなのだろうか。

今一度、本覚思想を田村芳朗氏の説に依つて規定すれ
ば(7)、内在的原理、内在的相即論を出て、仏教の相对
関係であつた煩惱と菩提、生死と涅槃、あるいは永遠と
現実、本質(理)と現象(事)といった二元分別的な考
えを突破、超越した顯在的相即論が、本覚思想である。
という事は、この現実には、まさに、常寂光土の様相を呈
していなければならないのである。

しかしながら、聖人に依れば、この現実には『立正安國論』にある通り、

自_二近年_一至_三近日_二天_レ變_レ地_レ夭_レ飢_レ饉_レ疫_レ癘_一 遍_三滿_二天下_一
広_二逆_レ地上_一 牛_レ馬_レ斃_レ巷_レ骸_レ骨_レ充_レ路_一 招_レ死_レ之_レ輩_レ既_レ超_二
大半_一不_レ悲_レ之_レ族_レ敢_レ無_二一人_一。(定遺二〇九)

という状態だったのである。

また、『災難興起由来』では

疾疫惡鬼日來侵害、災恠首尾連過。(定遺一六〇)

という様相を述べられ、

『神國王御書』には

仏記云、我滅後末代には惡法惡人の國をほろぼし

(定遺八八五)

とあり、『諫曉八幡抄』では

去文永十一年に大蒙古よりよせて、日本國の兵を多くほろぼすのみならず、八幡の宮殿すでにやかれぬ。(定遺一八四一)

と述べられている。この様な現実を考え合わせる時、前述した様な顕在的相即論はあてはまらないのである。

ここであえて、更に「人間觀」と「国土觀」とに約し、聖人の現実に対する思想を見てみたい。まず、聖人の「人間觀」に約せば、『開目抄』には、

世もやうやく末になれば、聖賢はやうやくかくれ、迷者はやうやく多し。世間の浅き事猶あやまりやし。何況の出世深法慎なかるべしや。(中略)世間の罪に依惡道に墮者爪上の土、佛法によて惡道に墮る者は十方の土、俗より僧、女より尼多惡道に墮べし。(定遺五五五〜五五六)

と言われ、『顯仏未來記』には

依_二仏教_一墮_二惡道_一者多_レ自_二大地_一微塵。(定遺七四〇)

とあり、『小乘大乘分別鈔』には、

世間の罪よりも、仏教の失に依て無間地獄に墮る者数をしらず。(定遺七七七)

といわれる様に、当時の仏教は世間にとって無用の長物であるばかりか、却って人類に害毒を流す有毒な存在になっていると言ひ、『知恵亡國御書』では

今の代は外経も、小乘経も、大乘経も、一乘法華経等も、かなわぬよ(世)となれり、ゆえいかなとなれば、衆生の貪・瞋・癡の心のかしこきこと大覺世尊の善にかしこきがごとし。(中略)末代濁世の心の貪欲・瞋恚・愚癡のかしこきはいかなる賢人聖人も治がたき事なり。其故は貪欲をば仏不淨觀の薬をもて治し、瞋恚をば慈悲觀をもて治し、愚癡をば十

二因縁觀をもてこそ治給に、いまは此の法門をとひて、人をととして貪欲・瞋恚・愚癡をますなり。

(定遺二二二九)

という様に、聖人は、末代凡夫の邪見の盛んな有様を述べられ、末代凡夫は下根下機の衆生という人間否定の思想を有し、正像の時代とは異なるものであるとされるのである。

次に「国土觀」に約してみれば、『経王御前御書』には、

今の代は濁世と申して乱れて候世也。其上眼前に世の中乱れて見え候へば、皆人今生には弓箭の難に値て修羅道におち、後生には惡道疑なし。(定遺六八七)とあり、『曾谷入道殿許御書』では、

今入_ニ末法_ニ二百二十余年、五濁強盛_ニ三災頻起_ニ衆見_ニ之_ニ濁充_ニ滿_ニ國中_ニ(中略)去_ニ正嘉元年_ニ大地動_ニ文永元年_ニ大彗星_ニ此等_ニ災夭_ニ仏滅_ニ後二千二百二十余年之間_ニ、月氏_ニ・漢土_ニ・日本之内_ニ所_ニ末_ニ出現_ニ大難也。(定遺九〇〇)

また、『兄弟鈔』には

今の世にはなにとなくとも道心をこりぬべし。此世のありさま厭ともよも厭れじ。日本の人々定て大苦

に値ぬと見へて候。眼前の事ぞかし。文永九年二月の十一日にさかんなりし花の大風にをるるがごとく、清絹の大火にやかるるがごとくなりしに、世をいとう人いかでかなかるらん。文永十一年の十月ゆき、つしま、ふのものども一時に死人となりし事は、いかに人の上とをぼすか。(定遺九二五)といわれ、『兵衛志殿御返事』では、

これによりて天もその国をすつれば、三災七難乃至一二三四五六七の日いでて、草木かれうせ、小大河もつ(盡)き、大地はすみ(炭)のごとくをこり、大海はあぶらのごとくになり、けつくは無間地獄より炎いでて上、梵天まで火災充滿すべし。(定遺一四〇一〜一四〇二)

という様に、五濁の世、鬪諍堅固白法隱没という現実否定の国土觀なのである。

これらの聖人の遺文を通して共通するものは、まさに、現実を悪機・悪時・悪国と見る現実否定、人間否定の末法思想であり、いわゆる中古天台で展開された、現実の絶対肯定人間の絶対肯定の本覚論とは、大きな異りがある。この聖人の末法という認識が、付帯条件付きの不二相即論を生み出す一因になったと言えるであろう。

そして、妙法五字の受持により初めて人間を肯定して行くのである。ここに依っても、聖人の中古天台本覚思想の超克が見られるのである。

以上、甚だ概略的ではあるが、それをまとめれば、聖人における本覚思想は、叡山仏教の中古天台ばりの顕在的相即論ではなく、末法思想という現実否定の思想から受持譲与という手続きを経て、凡夫を肯定して行くという事であり、それに依って、聖人の中古天台本覚思想の超克を再確任した次第である。

註

- (1) 『日蓮教学の研究』（望月敏厚著）『日蓮聖人教学の研究』（浅井要麟著）『天台本覚論』（日本思想大系）『上古日本天台本門思想史』（浅井円道著）『鎌倉新仏教思想の研究』（田村芳朗著）等の著作を参照。
- (2) 『天台本覚論』（日本思想大系）田村芳朗稿「天台本覚思想概説」四七七～四八二頁参照。
- (3) 講座『仏教思想』第六卷第七章日蓮（浅井円道稿）二九九頁。
- (4) 『上古日本天台本門思想史』（浅井円道著）第一篇～第五篇の第六章、「一念三千論と真如隨縁論」参照。
- (5) 『天台教学史』（島地大等著）第四編日本古代天台史第

十二章「慈慧大僧正良源の中興」三八七頁以下

(6) 「一念三千」の思想が聖人に於ける本覚思想であるという事は極論かもしれないが、迷界と悟界の不二相即論である「一念三千」という事を考える時、ここではその様に規定した次第である。この問題については更に検討したい。

(7) 『天台本覚論』（日本思想大系）田村芳朗稿「天台本覚思想概説」四八〇頁。